

薬の影響を考える 臨床検査値ハンドブック 第2版

木村 聡(監修・編)

三浦雅一(編)

医療法人社団誠馨会新東京病院臨床検査室

石橋みどり

臨床検査は種々の要因により測定値に変動を来す。そのため患者の病態を正しく反映したデータを得るには検査の全プロセスでのあらゆる影響因子を把握し、包括的な精度管理を行うことが重要である。

現在、臨床検査データの精度管理は、検体サンプリングから結果報告までの全てのプロセスを管理する total quality control という概念で理解されている。

検体検査における検査過誤の約半数は pre-analytical process に発生するといわれ、pre-analytical process のうち、生理的変動、採血時の注意事項等の理解は浸透しているが薬剤の影響についての情報は十分とはいえない。

本書は検査項目ごとに基準値、測定法、臨床的意義とその解説、疑われる疾患に加え、薬剤の影響について偽高値、偽低値に分けてまとめられている。たとえば AST の項では高値となる薬剤として細胞障害型を示す薬剤：抗結核薬(イソニアジド、リファンピシン)、アニリン系鎮痛解熱薬(アセトアミノフェン)、免疫抑制薬(メトトレキサートなど)やアンジオテンシン変換酵素(ACE)阻害薬。低値を示す薬剤：抗リウマチ薬(ペニシラミン)、というように具体的な薬剤と、検査値への影響の内容を理解するために薬の作用機序が記載されている。

また、「column」と称して検査データに影響を与える抗凝固剤の種類、用途、その影響や、サンプルとしての血清と血漿の違いなど検体検査の基礎知識、さらに骨密度検査の進め方など、検査データを解釈するうえで必要なサイドメモが関連

項目の記載ページに付随して纏められている。さらに「関連チャート」として膠原病の診断基準、腫瘍マーカーの生理的変動要因、C型肝炎ウイルス検査の進め方などが記されている。

また第9章には TDM(therapeutic drug monitoring)対象薬物や CYP 相互作用一覧表、さらに付録として巻末には 37 ページに及ぶ「検査値に影響を及ぼす可能性のある医薬品」リストが掲載されている。TDM 対象薬物は測定法、有効治療濃度域、最高血中濃度到達時間、半減期などが一覧になっており見易い。「検査値に影響を及ぼす可能性のある医薬品」リストには副作用ごとに薬効分類された医薬品が、漢方製剤を含めて詳細に記載されており、従来の臨床検査値に関する幾多の書籍では見られない本書の特色であると言える。

サイズもコンパクトで、あらゆる場面で手軽に活用できるものであり、投薬内容に関する情報の乏しい臨床検査技師のみならず、医師、薬剤師、看護師、医学生等医療従事者にとって臨床検査に関する必携の書であると言える。

今後、新たな医薬品が臨床現場に登場した際には本書の改訂が望まれるところである。



●B6判/頁327/2014年
定価：本体2,800円＋税
[ISBN978-4-8407-4616-8]
株式会社じほう 刊